

## エッセイ

### たった一個のみかんで豊かになった——人口約 120 人の離島の語り—

シーミ・ハイサム  
エジプト出身、国際関係学修士

ハイサムさんは私が東京国際大学に特命教授として勤務していたときに、大学院修士課程の私費留学生としてエジプトからやってきた。日本語とアラビア語エジプト方言の「敬語の使い方の比較研究」について修士論文を作成するにあたり、私は指導教員の岡本能里子教授とともに彼の指導に当たった。大学院修了後は博士課程に進学を希望していたが、彼のテーマで指導を引き受けてくれる教員が見つからず、進学には失敗した。一時期、エジプトに帰国して、日本語教室を開いて活躍をしていたが、日本で働きたいという希望を捨てきれず、再度、来日して観光案内の職に就いた。

しかし、運悪く、新型コロナウイルスの猛威のもとで、観光業は低迷し、彼は間もなく転職を余儀なくされた。現在は小さい会社のプログラマーとして働いている。

彼が南海の離島に移住したのも、リモートでも成り立つ仕事であったことと、生活費が安い、という利点を生かすためでもあったが、日本人のメンタリティをよく理解することができ、地方の方言にも関心をもつハイサムさんは、そこでも新しい発見があったようだ。この日本語文も彼がひとりで書いたもので、素朴な気持ちをよく表現している。(塩尻和子)

豊かさを巡り様々な議論がある。人がお金では豊かになれるとは限らないということが、その議論の当たり前な結論の一つになっている。発展途上国の中でも、先進国で豊かなはずの日本に住んでいる私も、特に子供の頃は毎日、日本の物価で 5 万円ぐらいする大量の果物が、エジプトの豊富ではない家の食卓に置いてあった。食べ切れず半分ぐらい廃棄してしまうほどの食べ物の豊かさをみて、日本とエジプトはどちらが豊かなのだろうとよく思っていた。だが、日本に約 5 年間住んだ後、エジプトに帰省することになり、帰省中に母国の状態を見たことで、豊かさのもう一つの視点ができた。それは自分も含め、不便な交通手段や、それらに乗るために競争するようなエジプト人の不便な日常生活も、その反対に日常生活の便利さも、豊かさの一つの基準ではないかと考えるようになった。

エジプトの豊かさが「食料」などであれば、日本の豊かさは「日常生活の快適さ」なのでないだろうかと、最近よく思う。エジプトで長く続いている経済政策及び政治の不安定さ、更に治安の不安定化に伴う経済の悪化によって、現在は昔から続いている生活の不便さはそのままで、食料などの豊かさの景色がほぼ消えてしまった。そしてその経済状況の厳しさ

に伴い、人々の態度が以前と比べると激しくなり、心の豊かさも減ってきたように感じる。

発展途上国の問題が話される際、経済より心の豊かさを考えるべきだという強い主張があるが、母国を見ると経済状況と心の豊かさは何らかの関連があり、別々に考えるのは大間違いだと思うようになった。だが、離島に住み、ある経験をしたことで自分の考え方を改めて変わった。それを語る前にまず私が住んでいるところを紹介する。

私は鹿児島港からフェリーで4時間半ぐらいかかる三島村の黒島という離島に住んでいる。その離島はコンビニもスーパーも病院も高校もないぐらい何もないところだ。その離島に引っ越しする時、そのことをちゃんと説明して頂いたのだが、発展途上国のエジプトの最も田舎でも民間ストアぐらいあるのに、日本のような先進国の田舎だといくら何もないと言っても民間ストアぐらいあるはずだと勝手に思い、お米とマヨネーズと緊急事態のためにツナの缶詰ぐらいしか食料を持って行かなかった。

するとと言われた通り買い物できるところが全くなかった。今はインターネットの時代で、もちろんオンラインショッピングで買い物ができる時代になっているから、その手段はあるが、そうとはいえ、引っ越ししたばかりの時は上手に買い物ができず、購入したものが届くまで数週間かかってしまった。その期間はずっと朝も昼も夜もご飯を炊いてそれにマヨネーズと混ぜたツナを乗せて食べていた。厳しい状態でも、私はある程度の適応能力があり、飽きたと思っても、文句を言わずにそのルーティンを続けていた。そんななか、10日ぐらい経った頃、ある出来事が起こった。

ある日、車が故障した。ガソリンスタンドも何もない離島では言うまでもなく、そのような時は車に詳しい人を探し、その人に見てもらうしかない。その人がボランティアで車をみててくれ、それに対しお礼として何かあげるというような流れになる。現在は友達で、当時はまだ知り合いぐらいの関係の離島のある人にお願いしたところ、車を見に来てくれた。彼が着いたとき、フレンドリーな感じで「良かったらどうぞ」と言いながら私に蜜柑を投げた。

自分の方に飛んできた蜜柑を見て、私は何か妙な気持ちを感じた。その気持ちはただその人の優しさに対する感謝の気持ちだけでなく、その蜜柑をキャッチした際、不思議とその日まで感じたことがないほどの豊かさを感じた。自分はエジプトでも日本でも豊かな生活をしているという意識があったが、豊かさを感じるという感覚が分からなかつたことに気づいた。そして、最も衝撃だったのは、人生が最も豊かでないときに豊かさを感じるということだ。

人は豊かでもその豊かさを実感できないことが多いという話がよくされ、私たちはそれを聞いた時に共感するが、私はその日に実際にそのことを教えられたと思っている。私がたった一個の蜜柑で豊かさを感じたのは、自分の経済状態の問題ではなく、ただ離島に向かう時に買い物をしておかなかつたことと、離島に来たばかりのときにオンラインショッピングが上手にできなかつたためだが、世の中には経済状態が大変でたつた一個の蜜柑で豊かになる人がどのぐらいいるのだろうか、とこの経験をしてから思うようになった。

東京国際大学大学院国際関係学研究科修士課程修了、国際関係学修士

現在、勤務の関係で、鹿児島県鹿児島郡三島村黒島大里に住む